

学校経営ビジョン

- 児童の規則正しい生活の定着・家庭との連携
  - まずは規則正しい生活を送ることから不登校を防ぐ。家庭との連携を密にとり、家庭環境の把握に努め、保護者と良好な関係を築きながら、共に歩む姿勢で課題解決を目指す。
- 学力向上への取組の充実
  - 学習指導要領のねらいを理解し、「主体的・対話的で深い学び」の視点から、授業改善に取り組む。学校研究を深めながら指導力向上、学力向上をめざす。
- GIGAスクール構想の推進
  - PCを個別最適な学び・協働的な学びの有効な教具として活用し、一人一人を伸ばす教育の実践に取り組む。各研修への参加や校内でのOJTを充実させる。
- 児童の自己肯定感・達成感の醸造
  - いろいろな活動が再開される中、行事・活動の在り方を見直し、意義あるものにしていく。児童の自己肯定感や達成感を高める良い機会として取り組んでいく。
- 特別支援教育の推進
  - 特別支援学級・通級指導教室を核に、通常学級においても特別支援教育についての理解を深め、個々のニーズに応じた教育を目指す。
- 人材育成の推進
  - 若手教員早期育成プログラムに基づき、教職としての素養、学習指導力、生徒指導力、学校組織マネジメント等の資質・能力の育成を目指すとともに、ミドルリーダーの育成を目指す。
- コミュニティスクールの開始
  - 今年度より設置されたコミュニティスクールにより、学校と保護者や地域がともに知恵を出し合い学校運営を行っていく。より良い学校教育に向け、地域の力を有効に活用していく。

評価の項目	今年度の重点目標	具体的取組	主担当	現状及び取組状況	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	備考	判定結果(中間)	判定結果(最終)	今後の改善策
①教育課程・学習指導	自分の考えや思いを豊かに表現する	話し合う目的や視点を事前に明確にして、話し合いの場を設定したり、言語活動の中に自分が書いた文章について振り返る場を設定する。	教務主任 研究主任	立場や意図を明確にして、計画的に話し合うことや、目的に応じて書いた文章のよいところを見つけることができている。	【成果指標】 児童は、自分の思いを明確にして、他者に伝えようとしている。	めあてに合わせて話し合うことができたという児童が A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	児童アンケート7月・12月・C・Dの場合は、指導方法を再検討する。	A		児童アンケートの結果、肯定的な回答が85%であった。児童は、目的意識をもって考えを伝え合おうと取り組んでいることが分かる。今後は、さらに肯定的な回答のうちの「あてはまる」の割合が高まるように継続して指導していく。
②生徒指導 ※いじめの未然防止	きまりを守り、落ち着いて学習に取り組める子どもを育てる。	生活及び学習のきまり(山代ルール)の定着に向け、子どもたちの意識を高める。また、教職員は生徒指導の4つの視点を意識し、全校児童に一貫した指導を行う。	生徒指導主事	授業規律や集団ルールを守ろうとする児童がほとんどだが、きまりを守れない児童もいる。また、教職員も、生徒指導の3機能に加え、安心・安全な学校づくりへの意識を高くもつ必要がある。	【努力指標】 児童は、生活及び学習のきまり(山代ルール)を守ろうと努力している。	山代ルールを守ろうと努力した児童が A 90%以上 B 80%以上 C 60%以上 D 60%未満	児童アンケート 7月・12月・C・Dの場合は、指導方法を再検討する。	A		児童アンケートの結果、肯定的な回答が90.7%であった。児童の規範意識が高いことが分かる。ただし、きまりによっては整わない部分もあるので、継続した指導が必要である。また、きまりがある意味も考えさせながら指導していく。
③キャリア教育・進路指導	自己の役割を理解し、見通しを持って主体的に活動する子どもを育てる。	児童が自分の仕事に責任を持って取り組み、係・委員会・縦割り活動等の企画や運営に自ら参加し、行動できるように指導する。	キャリア教育 担当 児童会担当	自己の役割を理解し、与えられた仕事に取り組む児童は多いが、見通しを持って自主的に行動できる児童は少ない。	【努力指標】 見通しを持って、自主的に自分の仕事や活動に取り組んでいる。	係や委員会活動に自主的に取り組むことができた児童が A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	児童アンケート 7月・12月・C・Dの場合は、指導方法を再検討する。	B		与えられた役割や、毎日の作業的なことに対しては忘れずに取り組むことができている児童が多い。しかし、自分で新たな役割を考えたり、よりよい活動を精進して行っていくことには繋がっていない。日々の活動に取り組む中で、その内容自体について本当に必要かどうかを振り返ったり、目標に立ち返ったりすることを行っていく必要がある。
④保健管理	体を動かすことの楽しさを味わわせ、心身ともにたくましい子どもを育てる。	体育の授業の導入に身近な運動遊びを取り入れた体力づくりやコーディネーショントレーニングを取り入れ、楽しみながら体力向上を図り、望ましい運動習慣の確立を目指す。	保体部 (保健主事)	コロナ禍により運動習慣が乏しくなり、体力の低下が著しい。体育では、思い通りに体をコントロールできない児童が多く、体力テストの結果は、県平均より多くの項目で劣っている。	【努力指標】 体育の授業でできたという達成感を味わわせ、体を動かすことが楽しいと感じている。	体を動かすことが楽しいと感じている児童の割合が A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	児童アンケート 7月・12月・C・Dの場合は指導方法を再検討する。	A		体を動かすことが楽しいと感じている児童の割合は94%となりほとんどの児童が楽しみながら運動していると考えられる。今後は更に体力の向上を目指して運動習慣の確立につなげていく必要がある。
⑤安全管理	学校安全計画に基づき、学校安全に関わる取組を実施し児童・教職員の危機対応力を高める。	危機管理マニュアルのもと、対応について全教職員で共通実践できるよう計画的に研修会・OJT等を実施する。	教頭	個人情報保護の法改正等もあり、改めて防災や感染症だけでなく全ての危機管理についての共通理解を図る必要がある。	【努力指標】 危機対応能力が高まる職員研修を実施できた。	危機対応能力が高まったとする教職員の割合が A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満である	教職員アンケート 7月・12月・C・Dの場合、速やかに改善する。	A		火事や地震、熱中症等に対する理解が進み、教職員の意識は高まってきた。さらに研修等で、児童や保護者対応も含めた様々な危機管理についての理解と判断力を身に付けられるようにしたい。
⑥特別支援教育	こまめな情報交換やニーズの把握に努め、個に応じた支援の工夫と研修の充実を図る。	困り感のある児童に対し、校内支援委員会、専門相談に基づいて継続した支援を行う。児童の実態や教職員のニーズに合わせて、研修内容や教育支援員の配置を工夫する。	特別支援教育 コーディネーター	校内支援委員会で支援の方法を話し合っているが、支援を必要とする児童の数が多く、より効果的な支援体制や方法を検討する必要がある。	【努力指標】 児童の実態を把握し、校内支援委員会、専門相談などを活用して、個に応じた支援ができるように努める。	校内の特別支援体制とその効果に満足している教職員の割合が A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	教職員アンケート 7月・12月・C・Dの場合は、体制や指導のあり方を再検討する。	A		教職員アンケートの結果、肯定的な回答が96.1%であった。支援を必要とする児童が多いと感じるため、今後も複数の目で児童の実態を丁寧に把握し、保護者の思いも大切にしながら、早めの対応を継続していく必要がある。そのために、学年集団、全職員で気になる児童に関わるよう、支援会議の体制を整えていきたい。
⑦組織運営・業務改善	教職員がチーム山代の一員として、各部会や学年会を組織的、協働的に運営し、日常業務の効率化、機能化を進める。	各部会や学年会において、共通理解・共通実践が組織的・協働的に行われるようにする。ICTを活用し、教材や情報の共有化等による効率化を図り、働き方改革を推進する。	教頭	各自の経験や得意分野を生かし、各部会や学年会のつながりをもっと深め、情報共有やサポートをしながら組織的に校務の効率化を図る必要がある。	【努力指標】 各部会や学年会を中心に、組織的・協働的・効率的に取り組む。ICTを活用しながら業務改善に努めることができた。	ICTを活用しながら組織的・協働的・効率的に業務に取り組み、業務改善に努めたとする教職員の割合が A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	教職員アンケート7月・12月・B、C、Dの場合、組織体制や運営方法について再検討する。	C		肯定的な回答が77%であった。問題発生時は各主任を中心に組織的に助け合いながら対応できている。一方で、業務の標準化に課題が見られる。引継ぎを想定して分担すると同時に、隙間を埋める意識も大切にする。また、校内掲示板、クラスルーム等を活用した情報共有を進めたり、学年内外での情報共有を積極的に行っていく。
⑧研修	国語科の授業作りを中心に研修をすすめる。児童の主体的・対話的で深い学びを実現するための授業改善を図る。	単元構想シートをもとに授業をデザインし、模擬授業を通して、児童自身が対話のよさを実感できる授業づくりを工夫する。	研修部	授業の交流場面では、進んで話し合う姿が見られるようになってきたが、児童自身が対話のよさを十分実感できているとは言えない。また、そのための教師の手立てにも工夫が必要。	【成果指標】 研修を生かして目標達成のための意図的な交流と振り返る活動を設定し、授業改善を行っている。	研修を生かして授業改善を行った教職員が A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	教職員アンケート7月・12月・C・Dの場合、授業作りについての共通理解を再度図る。	B		アンケートの結果、できた・ほほほできたが88%にのぼった。計画訪問があり、全体会を通して研究について共有がはかれたと推測する。2学期は夏休みの研修を受けて、各学年さらに研究を深めたい。
⑨保護者、地域との連携	保護者や地域の方々とともに課題解決に取り組み、児童の成長を喜ぶことができる連携を図る。	学校だよりや各種お便り・配信メール・ホームページ・Googleクラスルーム等を通じ、保護者との連携・情報共有を大切にす。地域の方々と連携し、特色ある学校づくりを目指す。	教頭 各担任	各種お便り等で学校の様子を伝えているが、HP(ホームページ)やGoogleクラスルーム等ICTを活用しながら、保護者や地域との連携・情報共有をさらに充実させたい。	【満足度指標】 各種お便り、ホームページ、Googleクラスルーム等による情報発信等で学校の様子を保護者や地域に伝えることができている。	学校だよりのお便りやホームページ、Googleクラスルーム等で学校の様子が分かると感じている保護者が A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	保護者アンケート7月・12月・C・Dの場合、原因を分析し、改善策を立てて実践する。	B		学習の様子など、タブレット持ち帰りや掲載許可の問題があるため、積極的にGoogleクラスルーム等からの発信を進めることが難しいが、ホームページの更新を進めたり、学年便りの掲載をそろえたりすることに気を付けていく。
⑩教育環境整備	タブレット端末の操作に慣れ、一人一台タブレット端末を授業に積極的に活用できるようにする。	校内のICT環境を整備したり、GIGA年間研修計画に沿って研修を行ったりし、効果的にタブレットや視聴覚機器を活用した教育活動の実現を目指す。	情報担当	児童、教職員共に一人一台のタブレット端末を活用できるようになる必要がある。昨年度からGIGA年間研修計画に沿って研修を行っている。	【成果指標】 教職員が、情報活用能力体系の各目標を達成させるため、授業等で視聴覚機器を活用できている。	情報活用能力体系の各目標を達成させるため、授業等でタブレットや視聴覚機器を活用できていると思う教職員が A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	教職員アンケート7月・12月・C・Dの場合、タブレットや視聴覚機器の効果的な活用に関する共通理解を再度行う。	B		教職員アンケートの結果、肯定的な回答80%だった。今後も効果的なICTの活用を促すために、校内ミニ研修という形を中心とし、事例や応用した活用方法を紹介する。

学校関係者評価	
---------	--